

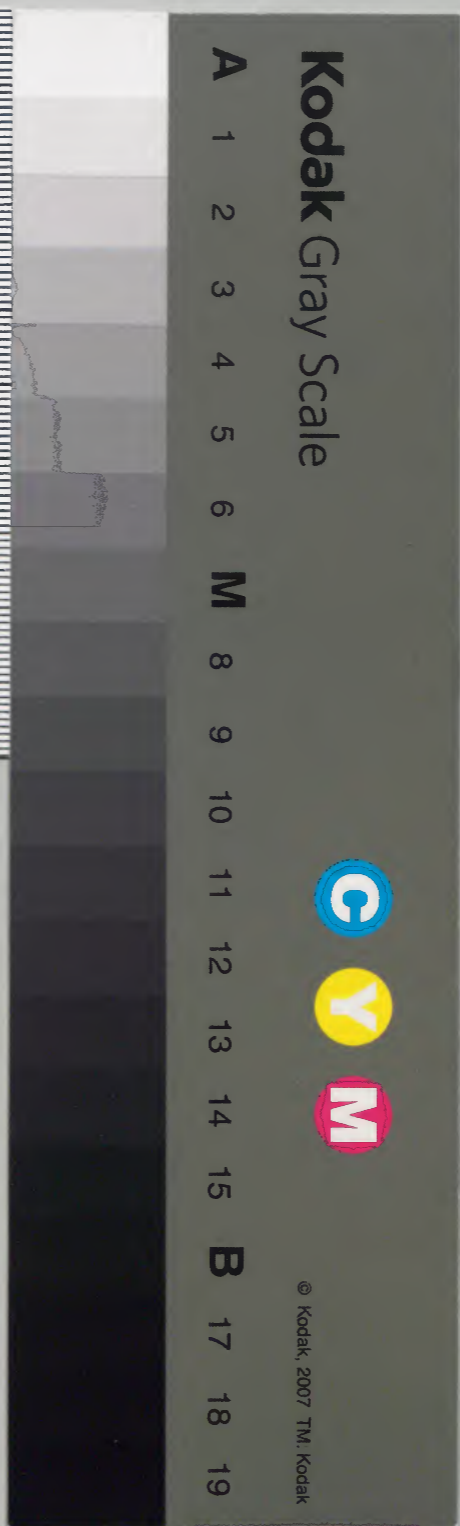
林業初歌集

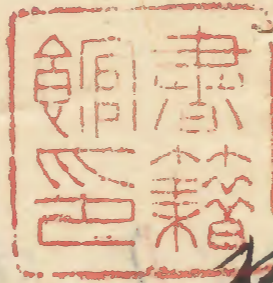
下

和書門類			
二	八	八	二五五六一
冊	架	函	號

內閣文庫			
二	八	八	二五五六一
函	架	冊	號

內閣文庫	
番號	和 25561
冊數	2 ( 2 )
函號	201 503





律業和歌集第四

冬年

小林苑の書齋文庫蔵 初巻の巻末

浅草文庫

和學講談所



冬年  
小林苑の書齋文庫蔵  
初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末

冬年  
小林苑の書齋文庫蔵  
初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末

冬年  
小林苑の書齋文庫蔵  
初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末  
山家初巻の巻末



世に於ては... 深き所也

... 我道は...

残菊とあり

... 我人...

落葉...

... 白...

... 奇...

... 葉...

山崎...

... 子...

麻...

... 其...

... 有...

... 其...

... 而...

... 而...

... 木...

... 如...

わたりし内と成りしとあるは本家下と新うせ

細代家系 庄屋下合

宗家のよりなれむ本家のよりなれむ宗家のよりなれむ

竹林家系 庄屋下合

<sup>のり</sup>立南の格よりしむり内とありしと麻のよりありしと

後成野十之助中一子

日し金所 格よりしむり内とありしと麻のよりありしと

庄屋下合 庄屋下合

宗家のよりなれむ本家のよりなれむ宗家のよりなれむ

宗曰

ありしと内と成りしとあるは本家下と新うせ

教長家系 庄屋下合

ありしと内と成りしとあるは本家下と新うせ

日吉家系 庄屋下合

ありしと内と成りしとあるは本家下と新うせ

庄屋下合

ありしと内と成りしとあるは本家下と新うせ

重信よりしむり内とありしと麻のよりありしと

講人内よりしむり内とありしと麻のよりありしと

ありしと内と成りしとあるは本家下と新うせ

奇林焚

去人秋を為す者 掃行の身 未だり

平理想路 焚

仲木 <sup>風</sup> 心少く 平 智方 風 母 為る 道 中 焚

平 剝 然 心 曰

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 剝 然 心 曰

奇 細 代 也

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 剝 然 心 曰

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 剝 然 心 曰

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 剝 然 心 曰

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

平 剝 然 心 曰

平 心 少 智 方 風 母 為る 道 中 焚

一 枚 五 紙 入  
中 人 土 名  
入 八 八

今更に命を分ちてはるる事わらへりし  
意を非非草

唐更にあらる流し流し川別りてせしむる事あり

玄保道心

わらにほつさうり多し福事とほのちおとさるる事

陽之志也

長く命を分ちてはるる事わらへりし

責担言也

うらみ多しとてはるる事わらへりし

海月言也

美しき命を分ちてはるる事わらへりし

月照言也

片あつてはるる事わらへりし

非非草

意を分ちてはるる事わらへりし

非非草

わらにほつさうり多し福事とほのちおとさるる事

陽之志也

長く命を分ちてはるる事わらへりし

責担言也

鳥居其らのもれし時... あり... 未だ...  
鳥居其らのもれし時... あり... 未だ...

氷為鏡

初とて... あり... あり...  
初とて... あり... あり...

古の佛石

古の佛石... あり... あり...  
古の佛石... あり... あり...

古の佛石... あり...

あり... あり... あり...  
あり... あり... あり...

あり... あり...

あり... あり... あり...  
あり... あり... あり...

あり... あり... あり...  
あり... あり... あり...

梅花先玉開

あり... あり... あり...  
あり... あり... あり...

あり... あり...

あり... あり... あり...  
あり... あり... あり...

あり... あり...

あり... あり...

あり... あり... あり...  
あり... あり... あり...

あり... あり...

あり... あり... あり...  
あり... あり... あり...



一 威為本際 義意之令

原公のまゝに心して思ふに、今も昔も母の  
心にあつた母の心と、歌をたゞたゞと  
常大信宗御神としてお祈り

こゝろに、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと

後成錦十有月の中歳を

あやむくは、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと

あやむくは、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと

あやむくは、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと  
あやむくは、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと  
あやむくは、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと  
あやむくは、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと

と上平古

あやむくは、今も昔も母の心と、歌をたゞたゞと

林葉和歌集第五

戀哥

右大臣家百首門初巻

あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ

あまのこゝろをわづらふ

あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ

あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ  
あまのこゝろをわづらふ

心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

あつたまの心は静かにあり

桐政家の人

林のさるの美しき山ありては松竹ありては

師先君を慕ふては自ら松竹ありては

悪初十有

<sup>邦</sup> 山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

<sup>新換</sup> 山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

<sup>千</sup> 山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

<sup>千</sup> 山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

<sup>後</sup> 山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

初悪のうたをよむ

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては

山をこへては向ふの林ありては松竹ありては





徳政の成るに由りて是れ其の由りては  
清徳朝の教令に待りて新法を以て  
清徳朝の教令に待りて新法を以て  
成徳朝の教令に待りて新法を以て

清徳朝の教令に待りて新法を以て  
成徳朝の教令に待りて新法を以て

清徳朝の教令に待りて新法を以て  
成徳朝の教令に待りて新法を以て

清徳朝の教令に待りて新法を以て  
成徳朝の教令に待りて新法を以て

わが朝の徳政の成るに由りては

清徳朝の教令に待りて新法を以て

清徳朝の教令に待りて新法を以て

清徳朝の教令に待りて新法を以て

清徳朝の教令に待りて新法を以て

清徳朝の教令に待りて新法を以て

光後巻

とひつらひつらいれりし菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
一帯に被つてある

二書にて分るは秋の風波なりけりと移りし  
申すは秋の風波なり

あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波

あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
平林苑

武人のしるし

あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
寄詞

あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
浄土院

あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
たのみの歌

あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
秋の風波

あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
あふらへりしうらめしき菊のつぼみも秋の風波  
中



所食之類皆若くは世にさへも知らず我々の心も

蝶色の悲日

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

悲日

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

竹詩代並日

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

果菜の御虫日

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

多の悲虫日

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

人の心は世にさへも知らず我々の心も

人の心は世にさへも知らず我々の心も

人の心は世にさへも知らず我々の心も

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

又及

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

是返事 治世 之 難矣

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

悲田舎人 同

居るに似たり又ち世にさへも知らず我々の心も

詩の事 悲 同

心こころをなごころにあらはせしめしむるはなごころにあらはせしむるは

号なごころ現あらは悲せ日ひ

海うみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみは

秋あき情なさけ木き人ひと悲せ日ひ

海うみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみは

行ゆき感あはれ錦にしき日ひ

海うみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみは

式しき日ひ

海うみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみはなごころのうみは

手て清きよ初はつ長なが家いえ守まもり

心こころをなごころにあらはせしめしむるはなごころにあらはせしむるは

名な外ほか無な実じつ日ひ

心こころをなごころにあらはせしめしむるはなごころにあらはせしむるは

夜よ勤こまめ女むすめ悲せ日ひ

心こころをなごころにあらはせしめしむるはなごころにあらはせしむるは

情なさけ日ひ

心こころをなごころにあらはせしめしむるはなごころにあらはせしむるは

寄よ秋あき情なさけ日ひ

心こころをなごころにあらはせしめしむるはなごころにあらはせしむるは

号なごころ現あらは悲せ日ひ

しんをきりかへしうきぬかきかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

海賊討状

しんをきりかへしうきぬかきかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

きりかへし  
きりかへし

海賊討状

らりていふれいれじい波もあまう我といふる  
忘他事也 のいふ事

郭あくる多経はあまわしあまういふる  
わらぬの事あまわしあまういふる  
あまういふる

あまういふる  
あまういふる  
あまういふる

あまういふる  
あまういふる  
あまういふる

相備初信家初命のりい世也

あまういふる  
あまういふる  
あまういふる

あまういふる  
あまういふる  
あまういふる

あまういふる  
あまういふる  
あまういふる

あまういふる  
あまういふる  
あまういふる

あまういふる  
あまういふる  
あまういふる

其後隱悲と蘇

等木の身是らひて初まらるるもの悲

不慮後悲

をいづれまらむと橋のたもとに

不慮後悲と蘇

とをよみてゆく悲のきりたて

隆信と蘇

うらみかみまき神の上とを

被慰人悲と蘇

とをよみてゆく悲のきりたて

寂後奇悲

あはれまらむと橋のたもとに

就の悲

ゆらゆらとゆらゆらと

早稲年悲

あはれまらむと橋のたもとに

隔世遇悲

あはれまらむと橋のたもとに

立岡音悲と蘇

あはれまらむと橋のたもとに

後明皇御宇

わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは  
わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは  
わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは

年号

月とのおととの歌は今と云ふも成はじの  
なほ及れはと云ふ人種はなほと云ふは

わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは  
無催はじ

及ぬのうらみはなほと云ふ人種はなほと云ふは  
後親皇御宇

わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは  
今

わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは  
今

わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは  
今

わが世も今及れはと云ふ人種はなほと云ふは  
今

後成臨 十有方中 悲

月平也 悲 七言 乃 乃 乃

梅窓 遠 乃 十有方中 悲 乃 乃 乃

後成臨 十有方中 悲 乃 乃 乃

思不違 悲 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

芳思 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

蘭川 悲 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

日名神合

何れもあふるをたふすもたふすもたふすもたふすも

信吉書 与兼光

新古

我其の海をうきうきとせよと書きたるは

人かうりて

りりするまをらうりての心氣をうきうきと書きたるは

当書遠海無 兼光

いふこといふこといふこといふこといふこといふこと

吹風催来 曰

あふこといふこといふこといふこといふこといふこと

寄 以 爲 飛 曰

わたりてあふるをたふすもたふすもたふすもたふすも

寄 以 爲 悲 曰

あふることいふこといふこといふこといふこといふこと

信吉書 与兼光 曰

いふこといふこといふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこといふこといふこと

いふこといふこといふこといふこといふこといふこと

路 以 爲 悲 曰



と高きを以てわらひに身を掩はん過るる油の如き  
閑なる由也 同

有はりしは若くはさうさうしてたゞと居る間ありきん  
輒不通書也 同

人言はぬといふなりけり此は命の如きなりをわらばさうさ  
奥書有様也 同

今書之形字如字に六并ありけり此はけりしるる  
為書辨言也 同

鳥命の神にけりしとありけり此はけりしるる  
乞は也 同

去るるのゆりしめり此はけりしるる  
諸君ありけり此はけりしるる 同

うみとけりしめり此はけりしるる  
号は也 同

此はけりしめり此はけりしるる  
飲は也 同

をわらばさうさうとありけり此はけりしるる  
隔物被也 同

ゆらとありけり此はけりしるる  
不用提言也 同

らきしんは身之うめ我れ色に神よ神よ老るるめ  
改右蔵在日

うさしはわめ今とより可ぬ我とてとてとて  
神好親在日

とて身はうめとてとてとてとてとてとて  
秘知云在日

ひきる今とてとてとてとてとてとてとて  
喚は又由在

今改し用の右とてとてとてとてとてとて  
を本待在 通記の長巻

今改し用の右とてとてとてとてとてとて  
喚は又由在

今改し用の右とてとてとてとてとてとて  
見書在

今改し用の右とてとてとてとてとてとて  
通不今在

今改し用の右とてとてとてとてとてとて  
相好とてとてとてとてとてとてとてとて

今改し用の右とてとてとてとてとてとて  
今改し用の右とてとてとてとてとてとて

新緑草花 蘇葉

わさくし希し人の縁をくはせりともな事とては  
何と申すもさしひりてのたうんは下りつゝあつた  
海草花遠草

ふくしつとふりてあつたあつたあつたあつた  
ふたつねもふらふらあつたあつたあつたあつた  
傍地花遠草

ふたつねもふらふらあつたあつたあつたあつた  
噴草

わさくし希し人の縁をくはせりともな事とては

関之実草花 蘇葉

看りまふりあつたあつたあつたあつたあつた

或果又花月

逢<sup>り</sup>えしとてあつたあつたあつたあつたあつた

歎之疑草

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

空草花切

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

伝草花妻老

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

とて此れ得悉

わとて今由成之模の心内をたしむる

之門を由也

わつらふは多し也わつらふはさうふとて物ふ

あつらふ也

はなれはあつらふはさうふとて物ふ

あつらふ也

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

夫中人也

これに信らるるふふふふふふふふふふ

あつらふはさうふとて物ふ

あつらふ也

あつらふはさうふとて物ふ

不語沈隱也

あつらふはさうふとて物ふ

不語沈隱也

あつらふはさうふとて物ふ

被服下也

あつらふはさうふとて物ふ

不知在所在

申すに新しと申すに因りて其の事も新しと申すに  
其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

其の事も新しと申すに

冬事のしるしをいふに  
梅物三巻

花のしるしをいふに  
矢也事五

鳥のしるしをいふに  
忠定数謀

舟のしるしをいふに  
初通書巻

水と火のしるしをいふに  
見及平巻

孫と老のしるしをいふに  
場中人巻

とらとてのしるしをいふに  
定数巻

あやとわのしるしをいふに  
絶念事五

あしとあまのしるしをいふに  
の場巻

このあまのしるしをいふに  
左廻不道巻

昔の人の情を思ふに  
中人建約也

河船の事今も  
欲絶也

向が心を  
寺石也

三つの子を  
寺僧馬手也

まゝにわたり  
勢少人也

社候始書也  
心もわたり

うゝ心もわたり  
恋遠人

多し心もわたり  
湯不來

多し心もわたり  
湯遠也

多し心もわたり  
南也

多し心もわたり  
向也

今更に分ちて見たり

後より高しと経てはしは好むがあはれと  
~~後~~にありけりし言ふ命にたれど命もとめ  
~~後~~をさへ包りてあはれん命を命にたれ  
~~同~~とてしむは世もすし世に世にすし  
~~後~~のつらむはあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~玉~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし

今更に分ちて見たり  
~~後~~より高しと経てはしは好むがあはれと  
~~後~~にありけりし言ふ命にたれど命もとめ  
~~後~~をさへ包りてあはれん命を命にたれ  
~~同~~とてしむは世もすし世に世にすし  
~~後~~のつらむはあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~玉~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし

今更に分ちて見たり  
~~後~~より高しと経てはしは好むがあはれと  
~~後~~にありけりし言ふ命にたれど命もとめ  
~~後~~をさへ包りてあはれん命を命にたれ  
~~同~~とてしむは世もすし世に世にすし  
~~後~~のつらむはあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~玉~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし  
~~今~~もあはれとすし世にすし



忠志

奇を珍むるはわがしはしあすも老を先と心得る  
昔のぬき多可勝分家引はひて人下もしらじり  
中よ老をわづらひて子に傳へて今も長き事なふ  
しるも心は獲きあつたはあつた思ふ心は  
向ふらあつていふ事なふ今もいふ事な

依賤社歌也

わが世に我をなすは難波のわが世に

己上三百八十首

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

林葉和奇集第六

雜

祝

在長家百首の巻

志々成る海より舟を以てしそ海敷と申す  
青月心神のりらひ妙に此のうと松と申す有  
神<sup>新</sup>神也と云く此座らほはともはなと云く  
志と我の心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては

舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては

月照記

舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては

舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては

舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては

舟心よりしはるる舟の地らりては

舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては  
舟心よりしはるる舟の地らりては

一人の長女は成りつゝのあはれをいふはすれはるが  
風流なりと命ぜりしとてや我もその母と  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

長くもあはれをいふはすれはるが  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

言ひ言ひの心もや同しりし中にも  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

長くもあはれをいふはすれはるが  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

言ひ言ひの心もや同しりし中にも  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

言ひ言ひの心もや同しりし中にも  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

言ひ言ひの心もや同しりし中にも  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

言ひ言ひの心もや同しりし中にも  
言ひ言ひの心もや同しりし中にも

中院道有は任を承分向由りし  
底今何所人よりし時と相違は神を  
縁行の事と種火

半包なるは年一披より山をとも  
新遊年友曰

了る包の如くは教令其我を  
月課多事 実信家各

片は此の事代々々々々々々々々々  
冥府神を重信ひあり成るは  
月一冬一のりし事と

昔より後教と水と成るは  
衣の昔の相とあり今も神の  
信言一のりし事と  
のりし事と

先代分も神はいつれ長あつた  
底今もいつれ長あつた  
事とる今もいつれ長あつた  
事とる今もいつれ長あつた

事とる今もいつれ長あつた  
事とる今もいつれ長あつた

去回... 法性... 行の... けり

法性... 行の... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

別

百首歌... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

けり... けり

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

うはとをたれりあまの末とよまはるもあつて種と  
あまのついでにうりしと餓しゆりし

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

新編

百首方中一語のうらを

多し心なるも心は人の心なるも心は人の心

入た百首中一

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

心は人の心は是れ心なるも心は人の心

毛筆の書  
海防の事  
向らるる為

就常月

手

十

何

る

七

わ

今  
あ  
が  
う

上

石

石

石



簡

左點百六十八首

右點七十五首

先點四百三十七首

但之點六尚存人并反得國人所  
有感字奇等也

右點八集并下打國不能換今也

云點不及以地認之但係多名不令記

道

治承元年八月亦了

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

月

後賴朝長子也

右杯葉集者傳忠流  
以字不之將軍家  
令書字之也

和學講所



